

# WAVE



# editors' note

Start

Ignore

No

Welcome to our slightly late autumn edition of Hamawave, where we aim to embark on a journey through our perspectives as foreign residents working in Japan. We hope that our insights might offer tiny glimpses into the contrasts between Japan and our homelands.

This issue features many interesting articles, such as intriguing tales of Ireland's vibrant Halloween traditions. From ancient roots to contemporary celebrations, Amber has tried to let the reader experience the allure of Ireland's spooky festivities through their eyes.

Delving into more academic reflections, Joel has included an essay which he wrote during his time at university which aimed to navigate the nuances of changing attitudes towards gay marriage in Japan. Hopefully that will be a thought-provoking piece!

Excitingly, this edition introduces a new voice to our team. Join us in extending a warm welcome to Amber, whose diverse experiences promise to enrich our understanding of Japan's cultural landscape.

As the autumnal colors paint the world around us, we invite you to immerse yourself in these captivating narratives. Join us as we explore the intersections of culture, tradition, and personal perspectives in this edition of Hamawave.

Warm regards,  
Joel and Amber

少し遅めの秋のHamawaveへようこそ。このHamawaveでは、日本で働く外国人としての私たちの視点を通して旅に出ることを目的としています。私たちの見識が、日本と私たちの母国とのコントラストを少しでも垣間見るきっかけになれば幸いです。

今号の特集は、アイルランドの活気あるハロウィーンの伝統にまつわる興味深い話など、面白い記事が盛りだくさん。古代のルーツから現代の祝祭まで、アンバーは読者にアイルランドの不気味な祭りの魅力を彼らの目を通して体験してもらおうと試みてます。

よりアカデミックな考察として、ジョエルは大学在学中に書いたエッセイをページ6に掲載しました。それが示唆に富んだ作品になることを願っています！

エキサイティングなことに、今号では私たちのチームに新しい声がかかります。その多様な経験は、日本の文化的景観に対する私たちの理解を豊かにしてくれることでしょう。

秋の色彩が私たちの周りの世界を彩る頃、私たちはあなたをこれらの魅惑的な物語にご招待します。今回のハマウエーブでは、文化、伝統、そして個人的な視点が交錯する様を探求していきます。

よろしくお祈りします。

ジョエルとアンバー

# contents



## Page 1

Editors' Notes  
HAMAWAVEへようこそ

## Page 2-4

New CIR Introduction- Amber Thompson  
新任国際交流員 トンプソン・アンバー

## Page 5

Celebrating Inclusivity and  
Achievements with Netflix's 'Down  
for Love'

包括性と成果を称賛する Netflix の  
『ダウン・フォー・ラブ』

## Page 6-11

The Effect of Media on Modern Day  
Japan's Tolerance and Awareness of  
Gay Marriage

現代日本における同性愛者に対する寛容  
性と認識のメディアの影響

## Page 12

Seasonal Picks  
今秋のおすすめ

## Page 13-17

昔話の王国ーイギリス  
U.K. - the Kingdom of Folktales

## Page 18-20

Hallowe'en in Ireland  
アイルランドのハロウィン

## Page 21

マイブームの歌  
Songs

## Page 22-24

JET Diary - ALT Interview  
JETの日記 ALTへのインタビュー



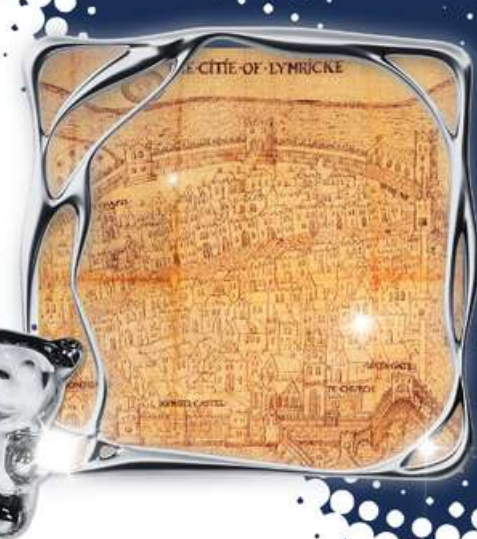
# Amber

## 新任国際交流員の紹介

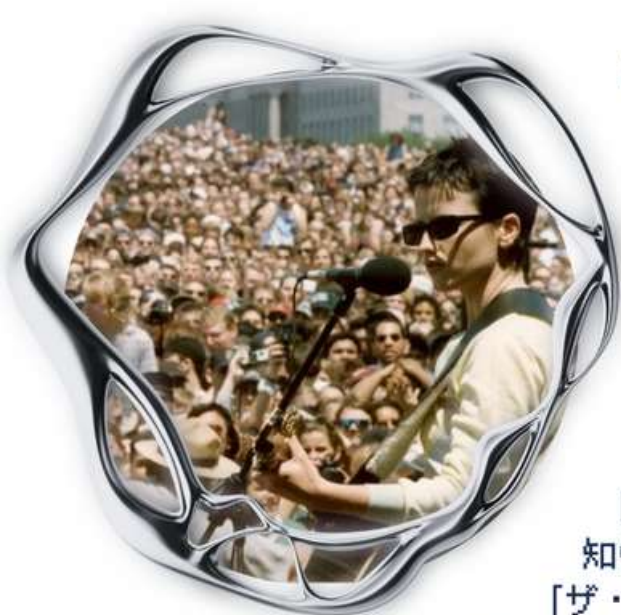
## NEW CIR

Hello everyone, or as we say in Irish, "Dia dhuit"!  
I'm Amber Thompson, a 2nd-year CIR from Ireland. I recently transferred to City Hall from the Hamamatsu Board of Education in August.

皆さん、こんにちは！アイルランド語で言うと「Dia dhuit」！アイルランド出身の国際交流員、アンバー・トンプソンと申します。8月に浜松市教育委員会から市役所の国際課に異動しました。よろしくお願いいたします。



I am originally from Limerick City, which is in the West of Ireland, and is the country's third most populated urban area. Limerick City is 1100 years old and was originally a Viking settlement before evolving into a medieval walled town, a Georgian city, and then the vibrant metropolitan area it is today.  
アイルランドの西部に位置するリムリック市出身で、国内で3番目に多くの人々が住む都市です。リムリック市は約1100年前にバイキングの集落として始まり、その後、城壁に囲まれた中世の町、ジョージア時代の都市へと発展し、今日のような賑やかな都市となりました。



Similar to Hamamatsu, Limerick City is known as the 'City of Music,' boasting world-renowned musicians like The Cranberries, traditional music festivals like the River Fest, held annually since 2004 and attracting around 140,000 visitors last year, and prominent concert halls and live music venues such as the Irish Chamber Orchestra and the Irish World Music Centre.

浜松と同様に、  
リムリック市も  
「音楽の街」として  
知られており、

「ザ・クランベリーズ」  
などの世界的に有名な

音楽家が多数活動しています。また、「リバーフェスト」  
などの伝統的な音楽フェスティバルも毎年開催され、  
昨年は約14万人の訪問者を引き寄せました。

「アイリッシュ・チェンバー・オーケストラ」や「アイリッシュ・  
ワールド・ミュージック・センター」などのコンサートホールや  
ライブ音楽の会場も充実しています。



My hobbies include learning new languages, going to cafes, baking, volunteering and shopping. Although I don't get many chances to practice with native speakers, I've been enjoying studying Korean lately. I also love reading, particularly late Showa manga and non-fiction books. My current favorite is "Yuukan Club."

趣味は言語学、カフェ巡り、お菓子づくり（特に和菓子）、読書、ボランティアと買い物です。ネイティブスピーカーとの練習の機会はあまりありませんが、最近韓国語の勉強をととても楽しんで  
います。また、読書も大好きです。特に昭和後期漫画やノンフィクションの本が好きです。最近の  
お気に入り『有閑倶楽部』です。



I am very passionate about cultural exchange. As a student, I acted as the Trips Officer for my university's International Society, which involved organizing bi-weekly trips to some of Ireland's most attractive locations for our visitors, and hosting weekly parties where international and Irish students could come together to build their own community and promote intercultural awareness. I have also worked part-time in the International Education department at my university, helping international students to adapt to their new environment and providing educational support for non-native speakers of English.

私は文化交流に非常に興味を持っています。学生時代、大学の国際交流会のツアーガイドを務め、アイルランドで最も魅力的な場所への隔週の旅行を企画し、留学生とアイルランドの学生とのコミュニティの形成を促し、文化の意識を高める場を提供しました。また、大学の国際教育課でバイトをしており、留学生が新しい環境に適応し、英語が母国語でない学生の教育支援に従事していました。



This is why I am thrilled to be working in the International Affairs Department of the City Hall and at HICE, where I can leverage these experiences in the field of international exchange as a Coordinator for International Relations and as a translator and interpreter.

そのため、市役所の国際課とHICEで働けることを非常に光栄に思っています。ここで、国際交流の分野での経験を活かし、国際交流員として、また翻訳者および通訳者として活動

# CELEBRATING INCLUSIVITY AND ACHIEVEMENTS WITH NETFLIX'S 'Down for Love'



"Down for Love" is a 5-episode series, produced in consultation with the New Zealand Down Syndrome Association, that introduces us to a diverse cast of young people, each with Down syndrome, as we follow their journey to find a lifelong partner.

『ダウン・フォー・ラブ』は、ニュージーランドダウン症協会と協力して制作された、5エピソードシリーズで、私たちにダウン症を持つ多様な若者たちを紹介し、出演者が生涯のパートナーを見つける旅に誘います。



This genuinely heartwarming show challenges our perspectives on important societal issues such as disability awareness and inclusivity. It skillfully blends moments of laughter with touching and emotional narratives. While I usually don't get emotional when watching TV, many scenes moved me to tears.

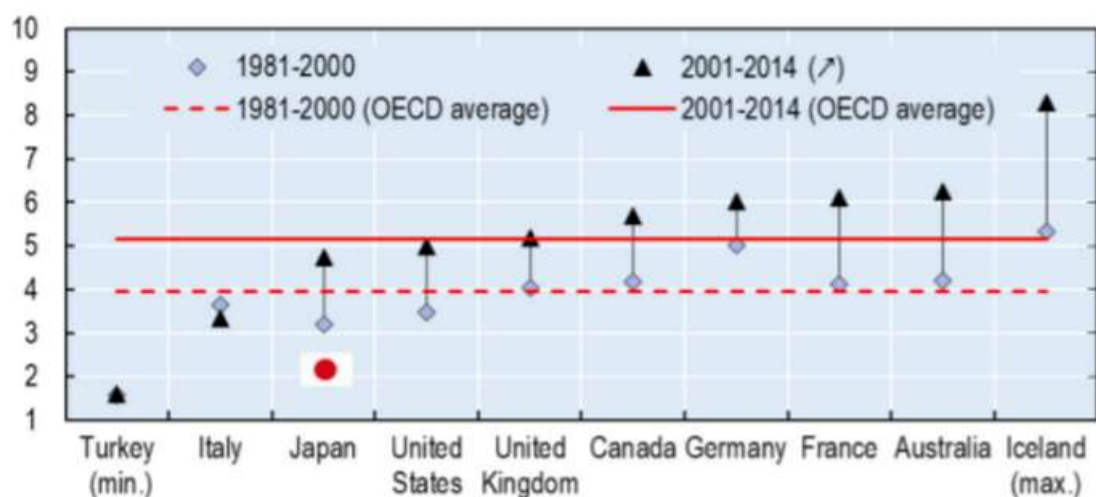
この実に心温まる番組は、障害意識や包括性などの重要なテーマに対する私たちの視点を挑戦し、笑いと感動的で感情豊かな物語を巧みに組み合わせています。私は普段、テレビを観ながら涙を流すことはありませんが、この番組は私を涙ながらに感動させました。

One of the standout aspects of the show is its celebration of inclusivity and the potential of individuals with down syndrome by showcasing the remarkable achievements of its young cast members. Among them are actress Libby Hunsdale, who starred in the 2021 film "Poppy," award-winning photographer, swimming champion, and polyglot Carlos Biggemann, and 18-year-old model Lily-Mae Ivatt Oakley. It's heartening to witness individuals with Down syndrome taking center stage and proving that they can excel in various aspects of life.

番組の際立つ要素の一つは、包括性とダウン症を持つ個人の可能性を称賛する点です。番組は、若い出演者たちの素晴らしい業績を紹介しています。その中には、女優のリビー・ハンズデール（最近では2021年の映画『ポピー』で主演）や、賞を受賞した写真家であり、競泳のチャンピオンで多言語を話すカルロス・ビゲマン、そして18歳のモデル、リリー・メイ・アイヴァット・オークリーなどがいます。ダウン症を持つ個人がスクリーンの中で主役になり、生活のさまざまな側面で成功できることを見ることは、心温まるものです。

# 現代日本における同性愛者に対する寛容性と認識のメディアの影響

世界各国で同性愛者は歪んだ認識と寛容への道を突き進んできたのである。日本も例外ではない。しかし、90年代の日本は「ゲイブーム」という現象を経験してきたにもかかわらず、同性婚やパートナーシップなどが依然として公式に認められていない。それで、日本における「同性愛者に対する認識や寛容性はどの程度変わったのか？」や「メディアの影響で変わったのか？」を理解する必要があるだろう。



世界各地ではこれまでの40年間にわたって同性愛者に対する寛容性と認識が上昇してきた傾向が明確に見られる。日本においてもそういった傾向がある。OECD (2019) のグラフ (図1) を見ると、同性愛の寛容性のスケールにおいて、日本の1981~2000年の数値は3.2ポイントで、2001~2014年には4.8ポイントまで上がったということがわかる。更に、世界平均ポイントに比べて、日本の数値はおよそ同じであるが、わずかに下回っていると指摘している。ロイターの調査 (2013) によれば、同性愛を支持するとの回答は54%であったという。この結果の中から、年齢層をより詳しく見ると、30歳未満では8割を上回ったが、50歳以上では4割しかいなかったことがわかる。その2つのデータを踏まえて、寛容性は上がったとはいえ、直近30年の間にこそ日本人の同性愛者に対する考え方に影響を与えた出来事あったのであろう。



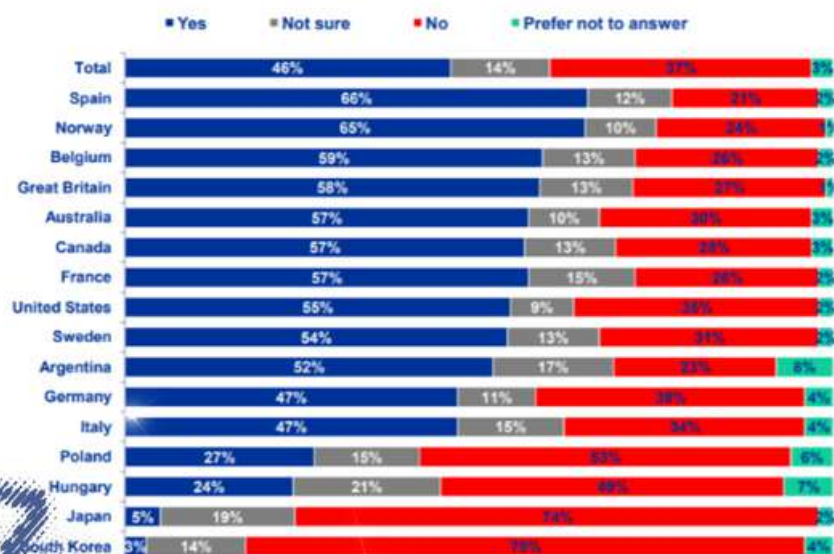
1991年から1994年にかけて、ゲイの人を話題としたマスコミ報道が日本で流行していた。その時、雑誌やテレビや映画などの範囲に限り、ゲイの人が出るのが当然になったのである。専門家はこの期間を「ゲイブーム」と名付ける。Lunsing（1997、267）はゲイブームが日本のメディアを風靡した現象であると述べている。秋田大学で行われた調査（2018）によると、回答者の60%が初めて「同性愛」という言葉を聞いたのは映画やテレビ番組などであるという。この調査の結果から、大半の日本人のLGBTとの接点はそのようなメディアの種類に限っていることがわかる。人間はメディアに影響されるため、日本のメディアで映すLGBTの人のイメージは日本人のLGBTに対する考え方に影響を及ぼす可能性があるというのも当然であろう。それで、日本における同性愛者に対する寛容性の変化は、そのマスコミを通じて高まった意識が原因であるという可能性もある。しかし、日本のマスコミに出てくるゲイの人のイメージは、果たしてどのようなイメージなのかを理解する必要があるだろう。

日本のテレビ番組や映画などに登場するLGBTの人はおおむね女装をする人である。McLelland（2005、39）によれば、日本のマスコミで、そういった女装をする人の代表は珍しいものではないという。そして、同性愛と女装を連想する日本人は大勢いると述べている。更に、普通の異性愛者と同じ格好をしているゲイやレズビアンの方はほとんど出てこない（アマルギオアイレ、2018、25）。女装する理由は、目を引いたり、目立ったりすることだから、日本人はすべてのLGBTの人がそのように簡単に見分けられると思っているのだろう。

さらに、日本人はそういうLGBTの人のイメージに慣れてきたため、頭の中でふとゲイの人とそのステレオタイプを組み合わせたのだろう。したがって、日本は同性愛者により寛容になってきたとは言えるとしても、その寛容性は、どのような同性愛者を基準としているであろうか。



Do you have a work colleague, close friend or relative who is gay, lesbian, bisexual or transgender?



A Global Advisory - June 2013 - G@45 Same-sex Marriage 28

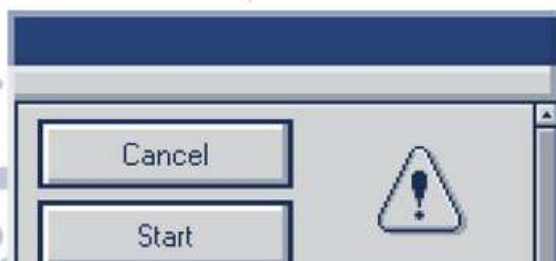
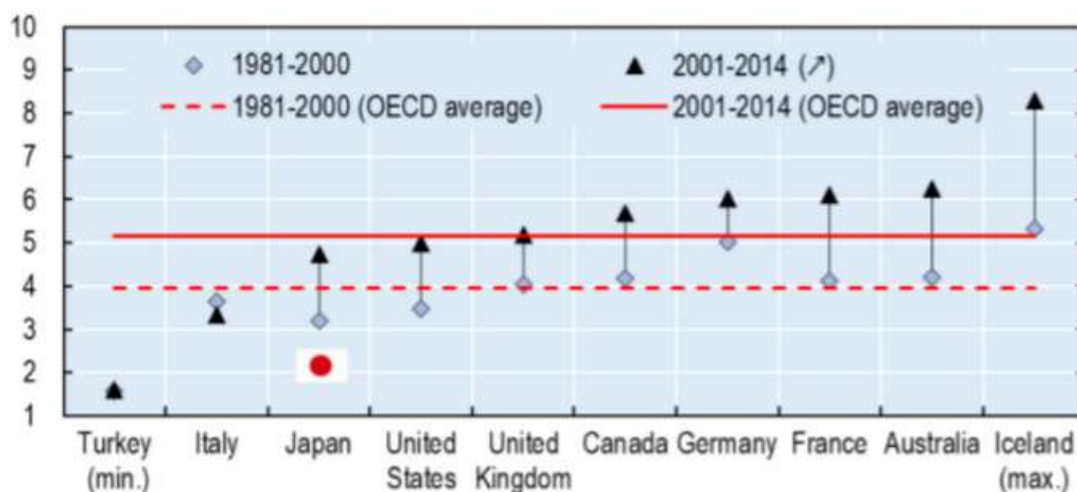


図2からわかるようにO E C Dの日本の「L G B Tの同僚・友人・親戚がいるか？」の調査結果はほぼ世界平均と同じであったが、身の周りにLGBTの人がいると答えた人は1割も達さないほど圧倒的に少ない。同性愛の発生率は文化や地域には関係がないとすれば、世界各国の割合はおおよそ均等なはずである。そうであっても、日本で知り合いにLGBTの人がいるかという質問に「はい」と答えた人の割合はたったの5%である。なぜなら、日本におけるLGBTの相手を見分ける能力や認識が、テレビに登場する女装をするタレントを基準としているからなのであろうか。マスコミのせいで、「LGBT」というと、日本人の頭に浮かぶのは日本社会に溶け込む人ではなく、むしろ女装をするタレントのように見える人であろう。その一方、知り合いでLGBTの人がいる日本人が少ないのは、日本人のLGBTの人が依然としてカミングアウトしていないからだという可能性もある。まだカミングアウトしていない理由は、マスコミによって広がった女装をするタレントのイメージと関係があるように思われたくないからであろうか、それとも周りの人に勝手に女装をする人だと見なされたくないからであろうか。しかし、いずれにせよ、一般の日本人にはLGBTの人を女装などの外見でしか認識できなくなっている。それゆえに、日本のメディアは日本における同性愛者に対する認識に影響を与えているという事がわかる。

今までの数十年にわたって日本における同性愛者に対する寛容性や認識にはポジティブな変化が見られる。その変化を引き起こしたのは、90年代に起こったLGBTの人への認識を高めた「ゲイブーム」である可能性がある。寛容性が伸びたのに対して、周りにLGBTの人のいる日本人の人数は世界平均から非常に乖離している。その理由としては、「日本人はLGBTの代表の女装をする人に慣れてきたが、実際に多様な姿のLGBTの人を認識できなくなっている」という可能性や、「多様な姿のL G B Tの人が現状として、そのLGBTの代表となってしまっている女装をする人とみなされたくないが故に、カミングアウトしてない」という可能性も挙げられる。それ故に、それらは日本のメディアと直接つながっているので、日本のメディアはその寛容性や認識に影響を与えたと考えられる。

# The Effect of Media on Modern Day Japan's Tolerance and Awareness of Gay Marriage

The path to awareness and tolerance for gay people around the world has had its ups and downs. In this sense, Japan is no exception. However, despite the fact that Japan experienced the "Gay Boom" phenomenon in the 90s, gay marriage and civil partnerships are still yet to be recognized by the Japanese government. Therefore, it is important for us to question and understand just how much the awareness and tolerance towards homosexuals has changed in Japan and did the media have any impact on this process.



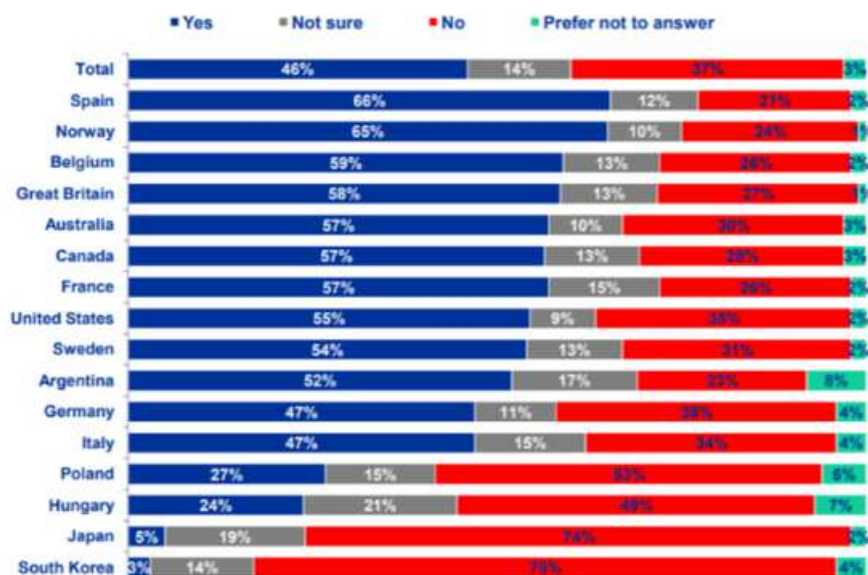
It's clear that on a global scale, tolerance and awareness of homosexuals has increased substantially over the past 40 years. This trend is also apparent in Japan. From the OECD (2019) graph above, we can see that on the scale depicting tolerance of homosexuality, the average figure for Japan in 1981-2000 was 3.2, but rose to 4.8 in 2001-2014. In addition, Japan's figure was roughly the same as the global average during both periods, but was still slightly less. In a study conducted by Reuters (2013), when asked if they supported homosexuality, 54% of participants responded affirmatively. From these results and looking more closely at the age groups, over 80% of those in the under-30 range answered yes, whereas those answering yes in the over 50s range was only 40%. Based on these two pieces of data, it could be hypothesized that an event occurred in the last 30 years that there have influenced Japanese attitudes towards homosexuals, although tolerance has increased.

Between 1991 and 1994, media coverage of gay people as a topic was prevalent in Japan. At that time, it became natural for gay people to appear only within the scope of magazines, television and films. Experts dubbed this period the 'Gay Boom'; Lunsing (1997, 267) describes the gay boom as a phenomenon that dominated the Japanese media. According to a survey conducted at Akita University (2018), 60% of respondents first heard the term 'homosexuality' in a film or television programme. The results of this survey show that the majority of Japanese people's contact with LGBT is limited to those types of media. As people are influenced by the media, it is not surprising that the image of LGBT people projected in the Japanese media can influence Japanese attitudes towards LGBT people. So, it is possible that the change in tolerance towards gay people in Japan is due to a heightened awareness through the media. However, it is necessary to understand what the image of gay people in the Japanese media really is.

LGBT people in Japanese television programmes and films are generally cross-dressers, and according to McLelland (2005, 39), representation of such cross-dressers in the Japanese media is not uncommon. He also states that there are many Japanese who associate homosexuality with cross-dressing. Furthermore, gay and lesbian people who dress like normal heterosexuals are rarely mentioned (Amarugioaile, 2018, 25). Since the reason for cross-dressing is to catch the eye or stand out, Japanese people may assume that all LGBT people are easily identifiable as such. Furthermore, Japanese people have become so used to such images of LGBT people that they have suddenly combined the stereotype with gay people in their minds. Therefore, even if it can be said that Japan has become more tolerant of gay people, what kind of gay people would this tolerance be based on?



Do you have a work colleague, close friend or relative who is gay, lesbian, bisexual or transgender?



As can be seen from Figure 2, the results of O E C D's Japanese "Do you have any L G B T colleagues, friends or relatives?" was almost the same as the global average, but the number of people who said they had LGBT people around them was so overwhelmingly low that it did not even reach 10%. If the incidence of homosexuality is independent of culture and region, then the proportion should be roughly equal across the world. Even so, only 5% of respondents in Japan answered 'yes' to the question of whether they know someone who is LGBT. Is this because the ability and perception of identifying an LGBT partner in Japan is based on female-acting celebrities on television? Due to the mass media, when the term 'LGBT' is mentioned, what comes to Japanese people's minds are not people who integrate into Japanese society, but rather people who look like cross-dressing celebrities. On the other hand, it is possible that the reason why so few Japanese people know someone who is LGBT is because Japanese LGBT people still have not come out. The reason why they have not yet come out may be because they do not want to appear to be associated with the image of cross-dressing celebrities spread by the mass media, or because they do not want people around them to see them as people who cross-dress without their permission. But in any case, the general Japanese public can now only recognise LGBT people by their external appearance, such as cross-dressing. Hence, it can be seen that the Japanese media has an impact on the perception of homosexuals in Japan.

There has been a positive change in tolerance and perceptions of gay people in Japan over the past decades. It is possible that the change was triggered by the 'gay boom' that took place in the 1990s, which increased awareness of LGBT people. In contrast to the growth in tolerance, the number of Japanese people with LGBT people around them deviates very much from the global average. Possible reasons for this include the possibility that 'Japanese people have become accustomed to people who wear women's clothes as representatives of LGBT people and are unable to recognize LGBT people in their actual diverse forms', or because 'LGBT people in their diverse forms do not want to be regarded as people who wear women's clothes, which have become their LGBT representatives as the status quo, The possibility that "they have not come out" is also mentioned. Hence, they are directly linked to the Japanese media, which could have influenced their tolerance and perceptions.



私がHICEの「これからバディー」と共に  
主催したハロウィンイベントからの一枚



都市・自治体連合（UCLG）カンファレンスで通訳させて頂いた際の様子

this season's

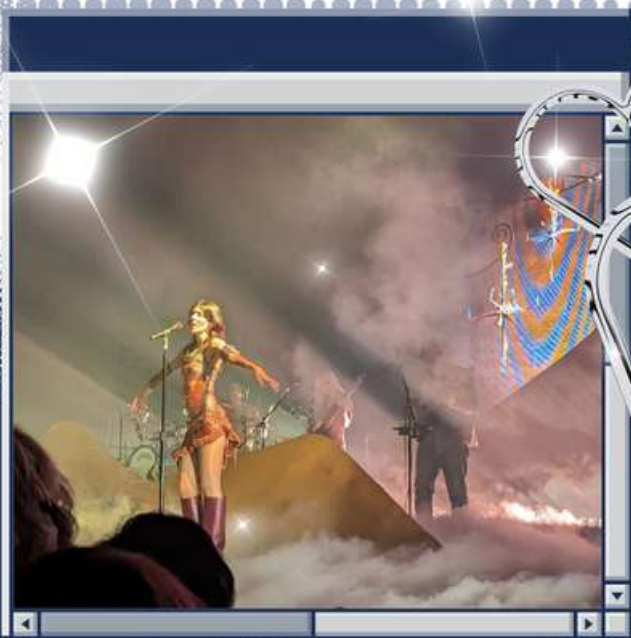


秋季のお気に入りの一枚

top picks

カロライン・ポラチェックのライブで  
撮った写真

画面に映った、友達とのボウリング大会で勝  
って新規ボウリング王になったジョエル




# folktales

## 昔話の王国 イギリス


昔話とは一体何だろう？昔話とは、代々受け継がれる短い物語のことで、動物のキャラクターを使って、民間の知恵を伝えたり、人間の本質を解釈したり、人間の正しい行動を議論したりするためのもので、その国の民間伝承として重要な役割を担っている。

音楽、芸術、法律、料理と同じように、昔話はその国、その人を表すとても大切なものなのだ。別の言い方によると、鏡は私たちの外面を理解するのに役立つように、昔話は私たちの内面がどのようなものなのかを理解するのに役立つ。昔話は、ほとんど人間社会の長期記憶のようなものだ。人間社会はそれなしには機能できない。「公式な」人類文化の多くは歴史や高度な芸術を通して記録されているが、昔話は、私たちが毎日の生活の中で、たとえ自分では気づいていなくても関わっている「非公式な」物語や知識を、時や空間を越えて伝えている。時代の流れにつれて、多くの昔話が存在してきた。何千年も何万年も、母親は子供を寝かしつけるため、行儀よくさせるため、退屈したときに楽しませるために、昔話を語ってきたのだ。

What exactly is a folktale? Folktales are short stories passed down from generation to generation, using animal characters to convey folk wisdom, interpret human nature and discuss correct human behaviour, and are an important part of a country's folklore. Like music, art, law and cuisine, folktales are very important representations of a country and its people. Put another way, just as mirrors help us to understand our outer life, folktales help us to understand what our inner life is like. Folktales are almost like the long-term memory of human society. Human societies cannot function without them. While much of 'official' human culture is documented through history and high art, folktales carry across time and space the 'unofficial' stories and knowledge that we engage with in our daily lives, even if we don't realise it ourselves. Many folktales have existed over time. For thousands and thousands of years, mothers have told folktales to put their children to bed, to make them behave and to entertain them when they were bored.



しかし、どの物語が受け継がれるか、どの物語が時間の流れの中で永遠に忘れ去られるかは、何が決めるのだろうか？重要な意味を持つ物語は、次の世代に受け継がれ、やがて昔話となる。その物語は、それを語る人々の文化と強く結びついているのかもしれないし、そのコミュニティの心を描写しているのかもしれないし、良い人間になるための重要な教訓を含んでいるのかもしれないのだ。どんな理由であれ、長い歴史の中で、多くの人々がこの昔話を重要視し、語り継いできたのだ。なんて素敵なことだろう！今日は、イギリスの誰もが知っている2つの昔話を紹介する。そして、みなさんが今日、イギリスについて何か新しいことを知ってくれることを願っている。



But what determines which stories are passed on and which are forgotten forever in the passage of time? Stories with significant meaning are passed on to the next generation and eventually become folk tales. The story may be strongly connected to the culture of the people who tell it, it may describe the heart of the community, or it may contain important lessons on how to be a good person. Whatever the reason, many people throughout the long history of the story have attached great importance to this folktale and have passed it on. How wonderful it is! Today we are going to tell you two folktales that everyone in Britain knows. And I hope you all learn something new about Britain today.





# アーサー王 と 円卓の騎士

皆さんに紹介する昔話は、「アーサー王」だ。アーサー王は、中世の昔話に円卓の騎士団のリーダーとして登場する、イギリスの伝説的な王だ。この昔話がどのように生まれたのか、また、アーサー王の姿が歴史上の人物に基づくものなのかは定かではない。伝説はウェールズかブリテン島北部で生まれた可能性がある。アーサー王は、多くの昔話として語り継がれ、今もなお、彼が本当に存在したのかが議論されている。その多くの昔話中でも最も有名なのが「アーサー王と石の中の剣」で、その昔話は次のようなものだ：

昔々、ウザー・ペンドラゴンがイギリスを支配していた。彼は公平で親切な王で、国民は幸せだった。しかし、彼には息子も娘もいなくて、王になる者もいなかった。さらに悪いことに、彼は公爵の妻であるイグレインと恋に落ちてしまったのだ！絶望した彼は、王室付きの魔法使いであるマーリンに助けを求めた。しかし、その条件として、二人の間に生まれた子供はマーリンに託すというものだった。王はこれを同意して、マーリンは王を公爵に変装させ、イグレインを連れ去ることに協力した。王はイグレインを魅了し、自分の城に連れ帰り、妻とした。しかし、9ヵ月後、彼女は男の子を出産した。王家の夫婦は、その子をアーサーと名付けた。しかし、王はイグレインとの間に生まれた子供をマーリンに引き渡すと約束していた。ウザーはやむなく一人息子をマーリンに託した。

マーリンはアーサーを密かに連れて行き、王の忠実な同盟者であるエクターの城で育てた。そこで幼い王子はエクターの息子として育てられ、エクター自身はもとより、誰もその正体を知らなかった。しかし、エクターにはケイという息子もいた。そして、幼いアーサーは結婚してない男女の間に生まれた子だと思われていたため、ケイとその仲間たちは彼をいじめていた。哀れな少年は、自分の出生を恥じて育ち、王家の血筋を知ることはなかった。一人息子を手放した数ヵ月後、ウザー・ペンドラゴンが病気になって、亡くなった。王国の後継ぎがないため、国は絶望に陥った。対立する公爵たちが、誰がイギリスを支配するのに最適な人物なのかをめぐって争った。

そんな中、貴族たちはマーリンに解決策を求めた。アーサー王の無事を確認したマーリンは、ロンドン地方ウェストミンスターに、大きな石を建てた。その石に、一本の剣が刺さっていた。その剣にはこう刻まれていた：

「この石からこの剣を引き抜いた者は、全イギリスに生まれた正しい王である」。

マーリンは、この剣は魔法であり、イギリスを支配するのに適した者だけが、この石から剣を引き抜くことができると説明した。剣を石から引き抜こうとする貴族たちが遠くから集まってきたが、どんなに強い男たちでも、引き抜くことはできなかった。やがて剣は忘れ去られ、イギリスはさらに悪化していた。

アーサーがちょっと成長したあとで、マーリンは彼に自己紹介をした。マーリンとアーサーは、アーサーがエクターのための仕事を終えた後に会って、2人は親しい友人となった。マーリンはアーサーに様々なことを教えて、常に知識は力よりも偉大であることを教えていた。アーサーは小柄で、剣を持ち上げることもできないような痩せた少年だったが、マーリンはアーサーの中に、イギリスを統一し、悪化したイギリスを救える、公正な支配者になる可能性を見出していた。そして、マーリンは教育と経験を通じて、若いアーサーがその可能性を最大限に発揮できるよう手助けした。正義と思いやりをもって支配することで、アーサーは史上最高の国王となる。

ある日、アーサーが15歳になったとき、マーリンはアーサーを「石の中の剣」の前に連れてきた。そこには、大勢の人々が集まり、心待ちにしていた。アーサーの義兄弟であるケイが最初に剣を抜こうとしたが、剣はびくこともしなかった。アーサーもやってみた。剣が抜けた。観客は歓声を上げ、アーサーはイギリスの王となった。

The folktale I would like to introduce to you is King Arthur. King Arthur is a legendary English king who appears in medieval folktales as the leader of the Knights of the Round Table. It is not certain how this folktale originated and whether the figure of King Arthur is based on a historical figure. The legend may have originated in Wales or northern Britain. King Arthur has been the subject of many folktales, and it is still debated to this day whether he really existed. The most famous of these many folktales is 'King Arthur and the Sword in the Stone', which goes as follows

Once upon a time, Uther Pendragon ruled Britain. He was a fair and kind king and his people were happy. But he had no sons or daughters, and no one to be king. To make matters worse, he had fallen in love with Igraine, the duke's wife! In despair, he asked Merlin, the royal wizard, for help. However, the condition was that any child born to them would be entrusted to Merlin. The king agreed to this, and Merlin helped him disguise himself as a duke and take Igraine away. The king was so enchanted by Igraine that he took her back to his castle and made her his wife. Nine months later, however, she gave birth to a boy. The royal couple named the child Arthur. However, the king promised to hand over any child born to Igraine to Merlin. Uther was forced to give his only son to Merlin.

Merlin took Arthur secretly and brought him up in the castle of Ector, a loyal ally of the king. There, the young prince was raised as Ector's son, and no one, not even Ector himself, knew his true identity. However, Ector also had a son named Kay. And because young Arthur was thought to be the son of an unmarried man and woman, Kay and her friends bullied him. The poor boy grew up ashamed of his birth and never knew his royal bloodline. A few months after giving up his only son, Uther Pendragon fell ill and died. With no heir to the kingdom, the country fell into despair. Rival dukes fought over who was best suited to rule Britain.

In the meantime, the nobles turned to Merlin for a solution. After confirming that King Arthur was safe, Merlin erected a large stone at Westminster in the London region. On the stone was a sword. On the sword was inscribed:

'He who draws this sword from this stone is the rightful king born in all Britain'.

Merlin explained that the sword was magical and that only those fit to rule Britain could pull the sword from the stone. Nobles gathered from far and wide to try to pull the sword from the stone, but even the strongest of men could not pull it out. Soon the sword was forgotten and Britain was even worse off.

After Arthur had grown up a bit, Merlin introduced himself to him. Merlin and Arthur met after Arthur had finished his work for Ector and the two became close friends. Merlin taught Arthur many things and always taught him that knowledge is greater than power. Although Arthur was a small, skinny boy who could not even lift a sword, Merlin saw in Arthur the potential to become a just ruler who could unite and save a deteriorating Britain. And through education and experience, Merlin helped young Arthur to realise his full potential. By ruling with justice and compassion, Arthur became the greatest kingdom that ever

# Halloween in Ireland Oíche Shamhna

Do you know where Halloween originates from?

Many of you may be thinking "America!". However, Halloween is actually a Celtic festival with its origins in Ireland, dating back over 2,000 years. In Irish language, we call it "Oíche Shamhna". In this article, I will talk about how Halloween originated in Ireland and how it is celebrated.

皆さん、ハロウィンはどこで発祥したのかご存知でしょうか？

多くの読者の方々は「アメリカ発祥でしょう！」と思っているかもしれませんが、実はハロウィンは、2000年以上の歴史がある、アイルランド発祥のケルト祭りです。アイルランド語では、「イー・ヒャ・ハウナ」と知られています。この記事では、アイルランドでハロウィンがどのようにして発祥したのかや、祝う方法について説明したいと思います。

I am sure you all know that Halloween is celebrated on October 31st. However, have you ever thought about why it is celebrated on this day?

October 31st marked the end of the Celtic year and the beginning of the new year. Today, it can be likened to New Year's Eve.

Samhain (or November) symbolized the onset of winter and the conclusion of the harvest season. The Celts held the belief that as the daylight hours grew shorter and the dark hours grew longer, the boundary between the living and the dead started to blur.

既にご存じだと思いますが、ハロウィンは毎年10月31日に祝われます。

しかし、なぜこの日に祝われているのかご存知でしょうか。

実は10月31日はアイルランドの旧暦では、一年の終わりにあたる日では、日本でいう大晦日に例えることができます。

ハロウィンは、アイルランドのケルト年の終わりと新年の始まりを象徴しています。

また、それと同時にハロウィンは、冬の始まりと収穫時期の終了を意味しています。

ケルト人は、昼間の時間が

短くなり、

夜の暗い時間が

長くなるにつれ、

あの世と

この世の境界が

あやふやに

なり始めると

信じていました。

It is said that on Halloween night, the transition between the otherworld and our world became possible allowing the spirits of the deceased to return to the world of the living. The Celts dreaded this night because it was believed that these spirits would cause chaos, damaging crops and bringing trouble to anyone unfortunate enough to encounter them.

ハロウィンの夜、あの世とこの世との行き来が可能になると言われています。これにより、なくなった者の霊がこの世の世界に戻れるようになってしまいます。ケルト人はこの夜をおそれました。なぜなら、これらの霊が作物を枯らしてしまい、遭遇してしまった不幸な者に混乱をもたらすものであると信じられていたからです。



These are images of Halloween masks and costumes from the 1920s, beautifully preserved in an Irish museum. As you can see, they are much scarier than the costumes we wear today, which symbolizes how genuinely fearful Irish people were of being abducted by the living dead during that time.

これらは1920年代に撮影されたハロウィンのマスクと衣装の写真です。これらはアイルランドの博物館に保存されています。ご覧の通り、これらの衣装は最近のハロウィンで見かける衣装よりもはるかに恐ろしいです。当時のアイルランド人が霊に襲われることをいかに恐れていたかがわがらうと思ひます。

Now that we understand a little bit about Halloween's origins. Let's look at the customs and the way we celebrate Halloween today! These also hold historical and cultural significance for the Irish people. The practice of dressing up on Halloween is also over 2,000 years old. Dressing-up on Halloween was believed to served two purposes. First, it was believed that dressing up as a ghost or otherworldly being would confuse and deter real spirits and second, it was believed that this would provide protection for the wearer.

今までハロウィンの起源について説明してきましたが、現代ハロウィンはどのように祝われているのでしょうか？これはアイルランド人にとっても歴史のおよび文化的な面で重要です。ハロウィンに仮装をする習慣もまた2,000年以上前から存在しています。これには実は2つの理由があります。まず一つ目は、幽霊や異世界の存在だと思わせるような仮装をすることで、本物の霊を混乱させ、しりぞけることができると信じられていました。そして二つ目は、仮装により、霊から守られると信じられていました。





The tradition of carving pumpkins in particular is not necessarily Irish. It is actually American. However, the Americans were influenced by the Irish. The practice of carving lanterns for Halloween originally came from Ireland, where turnips or potatoes were traditionally used. These vegetables were hollowed out and carved with scary faces as a way to ward off evil spirits and to protect their homes during the Celtic festival of Samhain.

The tradition of carving lanterns was brought to North America by Irish immigrants in the 19th century. In the United States, they found that pumpkins were more readily available and easier to carve than turnips or potatoes. Pumpkins soon became the preferred choice for creating jack-o'-lanterns due to their size and ease of carving.

特にカボチャを彫る伝統は必ずしもアイルランドのものではありません。実際にはアメリカの伝統です。ただし、アメリカ人はアイルランドに影響を受けました。ハロウィンのためにカボチャを彫る習慣は、もともとアイルランドから来ており、アイルランドではカブやジャガイモが伝統的に使用されていました。これらの野菜はくり抜かれ、恐ろしい顔が彫り込まれ、ハロウィンの間、悪霊を遠ざけ、家を守る手段として使用されました。

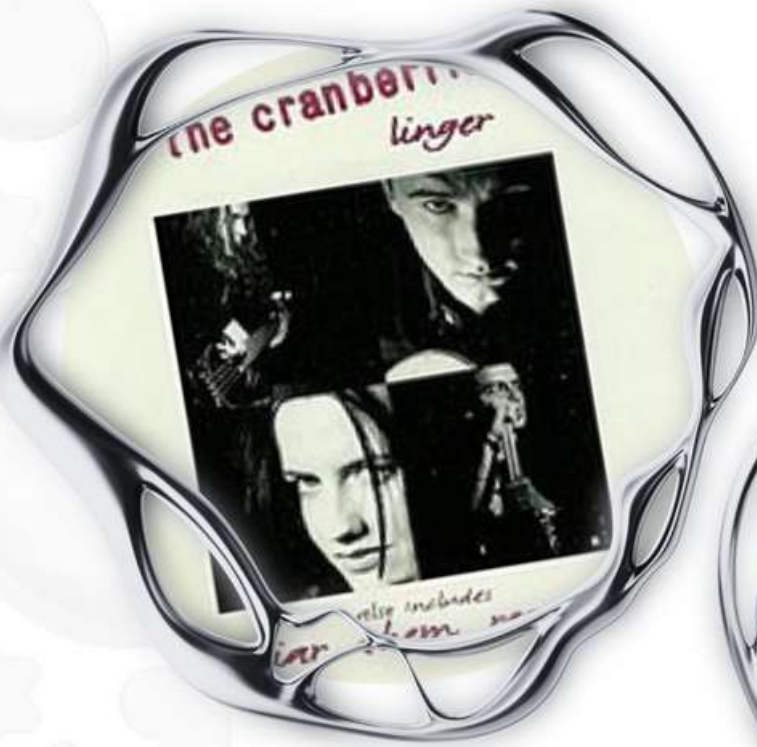
カボチャを彫る伝統は、19世紀にアイルランドから北米に移住したアイルランド移民によって北アメリカに持ち込まれました。アメリカでは、カボチャがカブやジャガイモよりも簡単に入手可能で彫りやすいことがわかりました。そのため、カボチャはジャック・オ・ランタンを作るための選択肢となりました。



The Macnas Halloween Parade is renowned for its extravagant and imaginative costumes, music, and large-scale puppets parading through the streets of Galway. It's just one of the many Halloween festivals we have in Ireland. I hope this glimpse is enough to entice our readers to visit Ireland and experience these festivities for themselves one day!

マクナスのハロウィンパレードは、派手で想像力豊かな衣装、音楽、そしてゴールウェイの街を回る大規模な操り人形で知られています。アイルランドには他にも多くのハロウィンフェスティバルがあります。これらは、アイルランドで開催される数多くのハロウィン・フェスティバルのうちの一つに過ぎないですが、読者の皆さんが是非アイルランドを訪れ、いつかハロウィン・フェスティバルを体験されることを願っています。





The Cranberries - Linger  
(1993)

青葉市子 -  
アンディーヴと眠って  
(2020)



Mitski -  
My Love Mine All Mine  
(2023)



t.A.T.U. - Nas Ne Dogoniat  
(They're Not Gonna Get Us)  
(2003)

# INTERVIEW WITH AN ALT

Name? お名前?

Thomas D'Arcy  
トーマス・ダーシー

Hometown? 生まれ育ち?

Ballsbridge, Dublin, Ireland  
アイルランド、ダブリン、ボールズブリッジ

Describe your town in 5 words?  
5つの単語で故郷を説明してください。

European, ヨーロッパ、教会、  
churches, フレンドリー、ラグビー、  
friendly, rugby, ビー、悪くない  
decent

Favourite thing about your town?  
故郷の好きなのところ?

People are 人々はフレンドリーで面白いです。  
generally friendly and good fun.



What is your favorite thing about Hamamatsu? 浜松の好きなのところ?

The rent! It's so much cheaper compared to my hometown.

家賃！僕の故郷に比べたら、ずっと安いですよ。

How many prefectures have you visited in Japan so far and where was your favourite?

これまでに何都道府県に行ったの？1番好きなのところは？

As of now around 30! But I hope to visit all prefectures during my time here.

今のところ30県くらい！でも、日本にいる間に全部の県を訪れたいと思っています。

It's hard to choose just one but if I had to Aomori was my favorite because of the Nebuta Matsuri.

一つを選ぶのは難しいですが、強いて言えば、ねぶた祭りがあるので、青森が一番好きだと思います。



# Interview with an ALT

What brought you to Japan? Why did you decide to come on the JET Programme?

Around when COVID started I was doing a job I didn't really like too much. I started to procrastinate and think about things I would like to do. I wanted to travel more and saw some amazing travel videos about Japan (especially the shimanami kaido). I decided I wanted to learn Japanese, live in Japan for a while and do the shimanami kaido. So I quit my job and did just that!



What is your favourite Japanese word and why?

一番好きな日本語の言葉は?

Not a word but my favorite phrase is "行き当たりばったり" It's my favorite because a good friend I made here said I live my life that way and I think it's a good fit

言葉ではありませんが、「行き当たりばったり」が好きです。ここでできた友達が、私はそういう生き方をしているとっていて、それがしっくりくるのでお気に入りです。



どんなきっかけで日本に来たの？

COVIDが始まった頃、あまり好きではない仕事をしていました。そのため、仕事を先延ばしにして、色々やりたいことを考えるようになりました。もっと旅行がしたくて、日本の素晴らしい旅行ビデオ（特にしまなみ海道）を見ました。そこで、日本に住みながら、日本語を勉強し、しまなみ海道を走りたいと思いました。それで仕事を辞め、その通りにしました！

How has your time been in Hamamatsu so far? What have been some of the challenges that you have faced, and how did you overcome them?

I've had an amazing time. People have been so kind and welcoming. It's not too big or not too small. I can get most places by bike. It's been a very cozy place to live and I like it a lot. The biggest challenges have been bank related. It's very difficult to get a debit card and making international transfers. The digital line pay card was a game changer. Bit boring but the truth.

浜松での時間はいかがですか。  
挑戦したこと、苦労したことありましたか。  
どうやって乗り越えられましたか。

とても素晴らしいです。浜松市民はとても親切で、僕を歓迎してくださいました。大きすぎず、小さすぎず、ほとんどの場所に自転車で行けるので、便利です。とても居心地のいい町ですので、とても気に入っています。一番大変だったのは銀行関係ですね。デビットカードを作るのも、国際送金をするのもとても困難です。「ラインペイ」カードがあって、とても助かりました。少し退屈ですが、それが事実なんです。

Final Words? 最後に一言

Hamamatsu has been a really cool  
place to live. I'm glad I came.

浜松市は住むにはとても楽しい町  
で、来て良かったと思います。

### 本人が撮った日本の景色の写真





**EDITORIAL**

**JOEL TEAHON**

ジョエル・ティホン

**AMBER THOMPSON**

アンバー・トンプソン

**INTERNATIONAL AFFAIRS  
DIVISION  
HAMAMATSU CITY HALL**

053-457-2359

kokusai@city.hamamatsu.shizuoka.jp

103-2 Motoshiro-cho,  
Chuo-ku, Hamamatsu-shi

浜松市役所国際課  
浜松市中央区元城町103-2

**HAMAMATSU FOUNDATION FOR  
INTERNATIONAL COMMUNICATION  
AND EXCHANGE (HICE)**

053-458-2170

hice05@hi-hice.jp

CREATE Hamamatsu 4F  
2-1 Hayauma-cho,  
Chuo-ku, Hamamatsu-shi

浜松国際交流協会  
浜松市中央区早馬町2-1 クリエイト浜松 4F

**now online**

<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kokusai/cir.html>